

タイトル	I don't know + that 節の使用における話し手の認識について： 認知文法的アプローチ
著者名（所属）	小林 隆（群馬県立女子大学）
連絡先 Eメール	kobataka@mail.gpwu.ac.jp
<p>1. 本発表の目的と方法</p> <p>本発表の目的は、①I don't know + that 節を用いる話し手（S）の動機を「話し手の認識」の観点から明らかにすることと、②認知文法の観点から I don't know + that 節と I don't know + if/whether 節の意味（スキーマ）を示すことである。</p> <p>①を明らかにするため、小説とアメリカのテレビドラマ (<i>Bones, Suits, The Mentalist</i>) より採取した I don't know + that 節の 20 例（と I don't know + if/whether 節の 93 例）を分析した。②についてはすでに森（2018; 2020）において Langacker (2004) の「コントロールサイクル」(control cycle) の概念に基づき、I don't know + that 節に関する認知プロセスが示されているため、I don't know + that 節に関しては森（2018; 2020）の提示・主張を支持しながら、本発表では I don't know + if/whether 節に関する認知プロセスを同じくコントロールサイクルの概念を用いて示す。</p> <p>2. 本発表の結論</p> <p>目的①については、S が I don't know + that 節を用いる動機は「S が S 以外の誰かが真だと認定している補文節の命題に対して否定的な態度を表す」ことにある（森 2007）。そして例文分析の結果、「S がどのような情報／誰の認識・想定に対する不同意を示しているのか」は具体的に、(1) S のみが持つ情報への認識を示すもの（e.g. And in all of my life, <i>I don't know that</i> I've ever met a man who could do that.）、(2) S が聞き手（H）の認識・想定に言及するもの（e.g. What sort of expression? –<i>I don't know that</i> I can explain.）、(3) S が S と H の共有知識に言及するもの（e.g. <i>I don't know that</i> we've ever met.）の 3 つに分類できることを示す。</p> <p>目的②については、森（2018; 2020）の議論に従って、I don't know + that 節に関する認知プロセスはコントロールサイクルの Disinclination を示すものと結論する。そして I don't know + if/whether 節は Non-Inclination を示すものであることを主張する。さらに上の (2) のコンテキストにおいて that 節と if/whether 節の意味的差異が小さくなり、後者の方がより婉曲的に相手に伝わることを示す。その背後に that 節と if/whether 節に関する認知プロセスの違いが反映している可能性を指摘する。</p> <p>&lt;参考文献&gt;</p> <p>Langacker, Ronald, W. (2004) "Aspects of the Grammar of Finite Clauses," <i>Language, Culture, and Mind</i>, ed. by Michel Achard and Suzanne Kemmer, 535-577, CSLI Publications, Stanford.</p> <p>森貞（2007）「I don't know that p と *?I don't realize that p について—「認定的知識」の導入」『日本認知言語学会論文集』第 7 巻, 235-245.</p> <p>森貞（2018）「I don't {think (that)/know that} + p の二義性について」『ことばのパーспекティヴ』, 中村芳久教授退職記念論文集刊行会（編）, 273-284, 開拓社, 東京.</p> <p>森貞（2020）「言語における leakage 現象」<i>JELS</i> 37 電子版, 79-85.</p>	